ビブリオバトらず
日本語学

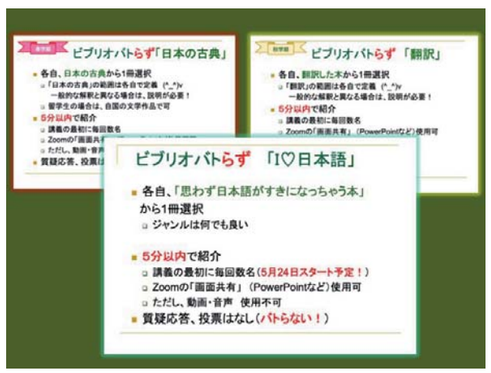
私の担当する講義では、受講生のみなさんに、本を紹介してもらうことがあります。名付けて「ビブリオバトらず」。「ビブリオバトル」という名前は聞いたことはあるかと思います。何人かが順番に本の紹介をして、質疑応答の後、どの本が一番読みたくなったかという「チャンプ本」を決めるという書評合戦です。でも、この「ビブリオバトらず」では、チャンプ本は決めない（＝バトらない）ということで「ビブリオバトらず」と名付けました。一応、半年の講義を通してテーマ（お題）を決めていて、この春学期に行った「ビブリオバトらず」のテーマは、日本語学概論の講義ということもあり、「I♡ 日本語」にしました。各自の考える「思わず日本語が好きになっちゃう本」を紹介してもらいましたが、小説はもちろん、マンガ、絵本、辞典、そして受験参考書まで、色々と面白い本が紹介されました。漢字・ひらがな・カタカナ、そしてＲＯＭＡＪＩと、四種類もの文字を使用する日本語、そして縦書きでも横書きでも書ける日本語、和語・漢語・外来語を使用する日本語。ルビ、方言、役割語など、日本語には魅力が一杯あります。私も、みなさんの発表を聞いた後は、いつもAmazon で即ポチしています。

なお、昨年度は、日本語文体史という講義を担当していたので、春学期のテーマは「日本の古典」、秋学期は「翻訳」でした。「日本の古典」でも、色々な解釈の「古典」が紹介されましたが、特に、センター試験（当時）で出題されたちょっとめずらしい古典の紹介があった時には、同学年の学生から、「懐かしい」「もう一度読みたい」など好評でした。

「I♡ 日本語」、みなさんは、どんな本を紹介してくれますか？

齋藤文俊　教授

「ビブリオバトらず」発表者募集のスライド



領域を越える日本文化
日本文化学

日本文化学講座では、日本文化を多角的な視点から捉え直す試みを日々行っています。具体的には、日本近現代文学をはじめとする言語芸術や、それを取り巻く環境などを分析することによって、日本文化の性質を明らかにします。日本文化学講座で学習するメリットは、やはり国際性と学際性が身につくことでしょう。従来の文学研究は、少し閉鎖的な面があり、私も大学院へ進学するまでは、文学研究と言えばテクストを読んで作家を研究するという印象がありました。（少し古すぎる印象かもしれませんが…。）しかし日本文化学講座では、かなりオープンな環境で研究に取り組むことができます。例えば、私は海外での日本文学の受容から日本文化を捉え直す翻訳文化研究を行っていますが、他の学生は、戦争文学の研究をしている人やジェンダーの研究をしている人など、扱うテーマは様々で、まさに十人十色といった研究が行われています。ゼミでは、基本的に一つのテーマについて学習しますが、所属学生の専門としている領域が様々であること、また留学生が多いことから、授業の討論や研究構想発表では、極めて領域横断的な発想を身に付けることができます。そして様々な着眼や思考から日本文化について考えたり、皆と討論することは、何より楽しいです。

日本文化という概念は、抽象的で目に見えるものではなく、非常に流動的であるため、その性質を見極めようと思っても、一筋縄ではいきません。しかし、文化の捉え難さにこそ学問的な魅力が凝縮されていると思います。

荒河秀　博士前期課程２年

博物館明治村 森鷗外・夏目漱石住宅にて

英語の謎に迫る
英語学

みなさんは、英語を学習する中で以下のような疑問を抱いたことはありませんか？また、これらの疑問に答えられますか？

- worm は o と綴るのに「ワーム」のように発音し、warm は a と綴るのに「ウォーム」のように発音するのはなぜか。
- If I were a bird, I would fly to you. のような仮定法において、現在のことを述べているのに過去形を用いるのはなぜか。
- Where will you go? のような直接疑問文では主語と助動詞が倒置するのに、I don' t know where you will go. のような間接疑問文では倒置しないのはなぜか。

高校までの英語学習では、このような規則を知識として得ることに重点が置かれていると思います。一方、これらの規則が「なぜ」そうであるのかというところまで掘り下げて考えていくのが英語学という学問です。私自身も、これまで当たり前のように覚えてきた文法や発音、綴りなどの「なぜ」を知る瞬間に英語学を学ぶ楽しさを感じています。

名古屋大学の英語学研究室では、英語について、文の構造を研究する統語論、意味に着目する意味論、音声を研究する音声学、歴史を研究する英語史、綴りの規則やアルファベットの成り立ちを論ずる書記体系論など様々な分野の講義が開講されており、あらゆる側面から英語に対する知見を深めることができます。

また、学部生同士のみならず、大学院生との繋がりが深いことも大きな魅力です。知識豊富な大学院生がいつでも親切に教えてくれるので、学びたい人にとって恵まれた学習環境であると感じています。

英語をもっと深く学びたい方、高校までの学校文法や発音に「なぜ？」と疑問を抱いている方はぜひ英語学研究室の門を叩いてみてください。

東條有希　学士課程４年

留学前に開いてもらった送別会の様子。研究室にて。

月刊
名大文学部
第129号
隔月刊行

編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2022年9月10日発行